

# 教 仏 名 聞

第34号  
(発行日)

2013年7月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/^souan/

## 《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日 午後2時始。

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日と12日午後3時始

○ 〈聖典学習会〉

毎月6日午後7時始。

○ 〈真宗入門講座〉

毎月18日午後6時30分始。

\* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

# お念仏と基準として

N 「真宗の門徒ですが、世の中に次々と起こる問題にどう判断し、どう対応していけばいいのか。そういう事によく戸惑います」

D 「どのような問題にですか」

N 「たとえば、原発は持続すべきか廃止すべきか。あるいは憲法を改正するべきかしないか。死刑制度は持続すべきか廃止すべきか。領土問題をどう考えたらいいか。人口問題はどう考えたらいいか。靖国神社の問題をどう考えたらいいのか。などなどいくらもあります」

D 「現実の諸問題をすっきりとクリアーに判断するのは非常に困難ですね。実際、ハッキリ判断できるような問題はほとんど無いですね。そんな中で今の自分にはこれがベターだと思ふのを選ぶしかないと思います」

N 「自分の判断に自信はなかなかもてません」

D 「私たちの考えは動揺しや

すいし、知らぬ間に世の中の風潮とかムードとかテレビの番組とか読んでる新聞などに影響されています。専門的によく学んで主体的に判断することはなかなかできないこととです」

N 「私はとにかく自分の判断がその場その場の状況や他者の意見に振り回されやすいので困ります」

D 「それはあなただけのことではなくて私もそうですね。ただ自分の判断が揺れやすく、時代の状況や風潮に振り回されやすい原因の一つは、自分がさまざまなことを判断する場合の判断基準になるものがないことであると思います」

N 「そうなんでしょうね」

D 「でも、あなたは真宗の門徒ですから、お念仏を称えることがありましよう。お念仏はものごとを判断する場合の基礎的な価値基準いわばモノサシでもあります」

N 「それはどういうことでしょうか」

D 「真宗の門徒でありお念仏を称えているという事は、自分は何を一番大事にすべきか、どこからものごとを見ていけばよいかに直接関係していることなのです」

N 「それはどういうことですか」

D 「このことは、今称えている南無阿弥陀仏をどう受けとっているか、という問題でもあります」

N 「称えている南無阿弥陀仏が私の価値判断にとってどういう意味があるのですか」

D 「お念仏を称えており、耳にナムアマミダブツと聞こえてくるといことは、阿弥陀仏が私とともにいて下さり、私を引き受けて下さり、私を浄土へと連れて下さる、そのしるし、そのすがたの現れです。それに気づくと、南無阿弥陀仏は私たちにとって最も尊い(本尊)ことであり、最も有難いことであり、最も根源的なことである、と知らされます」

らしめて下さる働きの現れがお念仏なのです」

D 「ええそうです。南無阿弥陀仏は私を支えている根本的に尊い働きであり、それが人生の軸足になると、人間関係とか財産とか健康といった諸価値は南無阿弥陀仏を中心に計られますから、そこに本来あるべき秩序が出来てきます」

N 「例えばお金とか財産などの経済的な価値についてはどうなりますか」

D 「それについてあらかじめ確認しておきたいことは、私たちがとって人生のあるべき在り方は、経済的な豊かさを目的として生きるのではなくて、南無阿弥陀仏の真実をいただき、そのお働きに従って生きる生き方でありましよう。裏から言えば、人生は南無阿弥陀仏が働く場所といえましよう」

N 「人生に、本来あるべき秩序というのは具体的にどういうことなのでしょう」

D 「南無阿弥陀仏をいただき、そのお徳を明らかにしていく人生においては、次ぎには生きる命が大切になります。そうして次ぎにその命を保つた

# 木村無相さんの法信(十一)

(昭和五十七年八月二十日)

無相さんから私への返信のお手紙の続き)

ウタガイ晴れる力なしと知る力も無いということがあります。

○

信ずる力も無いが、信ずる

力無しと、信知する力もワレワレには無い、まったくの無能無力者であるから、仰せのままにただ念佛のホカは無いのであります。

○

「信心」に手も足もでない私というところが、私の全面否定の「とどめの一点」であります。

唯念仏

せしめて下さるのであります。

念仏は浄土に生るるタネにてやはんべるらん、また地獄に墮つべき業にてやはんべるらん。

地獄であろうと、極楽であろうと、そういうことは「ただ念仏せよ」「称我名字」の仰せの如来にまかせまつりて、

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

と、いただくばかりであります。

も無いということですが、お念仏相續裡に感知させていただくことが大切中の大切と、思うことでもあります。

「信心」に手も足もでない私である。

ということだけでなく、それをそれと信知する能力もない、まったくの「愚かもの」ということ、そういう自分であるということ、如来回向の主体的に、意識の奥に獲得せられた回向の大悲大智の信心の智慧は、信知させて下されて、助かる「法」は、「ただ念仏一つ」と信知させ、仰せのままに、

それは『唯信鈔文意』に釈迦如来、よろづの善の中より名号をえらびとりて五濁悪時・悪世界・悪衆生・邪見無信の者に与えたまえるなりと知るべし。

との聖人のオサトシでわかることでありましょう。

「信ぜず、ウタガイ晴れざる」どころか、「不信」どころか、「まったく「無信」の

われらがために建立下された「念仏往生の誓願」「念佛成仏の道」「ただ念仏せよ」「称我名字」「極重悪人唯称仏」の道でありましょう。

○

そこで、くどくどと書いた如くに

信ずる力なし、

ウタガイ晴らす力なし

であるが、さらに、助からないことは、

信ずる力なし

○

信ずる力も無いが、信ずる

力無しと、信知する力もワレワレには無い、まったくの無能無力者であるから、仰せのままにただ念佛のホカは無いのであります。

○

「信心」に手も足もでない私というところが、私の全面否定の「とどめの一点」であります。

唯念仏

せしめて下さるのであります。

念仏は浄土に生るるタネにてやはんべるらん、また地獄に墮つべき業にてやはんべるらん。

地獄であろうと、極楽であろうと、そういうことは「ただ念仏せよ」「称我名字」の仰せの如来にまかせまつりて、

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

と、いただくばかりであります。

(了)

めに健康(安全さ)とか衣食住を確保するためのお金が大事になります。そしてまた南無阿彌陀仏のお心を学ぶ場所や善知識や友同行も同時に大事になって参ります。南無阿彌陀仏の教えを受け継ぎ伝える道場としての寺や教団も大事になります。そして自由に教えを説く活動が保証される言論や集会の自由などが大事になります。そして言論の自由のためには独裁よりも民主主義が望ましいことにもなります。このように何が一番大事であり、その次は何かというように、人生にあるべき秩序がおのずから出来てきます。そこからさまざま問題を判断し対処していくようになりましょう」

N 「そういう見方からさまざまな社会問題とか人間関係の問題などを考えるのですね」

D 「ええそうです。その根本的な価値基準になって下さるのが南無阿彌陀仏です。ですから源左同行は、ときどきまわりの人に「困ったら阿彌陀様に相談しなさい」と仰せられたそうです」

す。

「信」ということも、「まかせる」ということも、「すがる」ということも、「ハカラワヌ」ということも、自分でソレをしようとすれば不可能であるが、

ただ念仏せよ

の「よき人」の仰せのままに、

ただ念仏申す

ということの中に、右の一切はふくまれていくから、ワレワレがワレワレの力で、

信じよう

まかせよう

ハカラウまい

とすることは、サラサラ、イラナイのであります。

ここに不可称、不可説、不可思議な「念仏往生の誓願」

「念仏成仏」「ただ念仏」の最勝易行の道があるのであります。

ワレワレ凡愚の「ああして、こうして」ということや、「ああなつて、こうなつて」ということはナニ一つ、いらないのであります。

ただ念仏してミダに助けられまいらずべし

の「よき人」の仰せのままに、

ただ称えること

ただ称えること

のホカにナンニモいらぬ

であります。

○  
それで池山先生はふだん

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

これだけだよ、

これだけしかないのだよ

これだけでいいんだよ

と仰せられ、香樹院師は

信じられませんが、ウタガイ

晴れません、聞こえませんが

かがいたしましょう

との、サダ女に対して

「そのまま、称えるだけのお

助け、そのホカにナンニもいらぬ

ぞ」

と仰せくださつたのであります。しよう。

いろいろ考えたり

いろいろわかつたり

いろいろ覚えたり

いろいろしなければならぬ

としたら、どうしてこの「愚

悪無能」の私が助かることで

ありましょう。

○

久遠の迷妄、煩惱具足の、

煩惱熾盛、愚かなクセにウタ

ガイ、ハカライの止まぬ、悪

衆生、邪見無信の者と底の底

まで、ハッキリと、見抜き切

つての上で御成就下された

「念仏往生のご誓願」「ただ

念仏」よりホカに愚悪のワレ

ワレの助かる道はありません。

たとい助からぬとも、「た

だ念仏」のホカは無く、「助

からぬ身」に、永劫助からぬ

無有出離之縁のこの身に、「た

だ念仏」があるだけで十分で

はありませんか。ナンのユエ

にこの

一文不通にして経釈のゆく

じもナンニ一つわからぬ（第十

二條）この私が、

あれこれ考える必要があります

でしょうか。

（了）

### 《住職雑感》

江戸時代の初めにキリスト教は厳しく禁止され、キリシタンであることが分かる、棄教を迫られ、それを拒絶すると処刑された。更に徹底するために幕府は、民衆を寺請け制度によって、どこかの寺に所属することを義務づけたのである。このことは寺から言えば、一旦檀家として自らの寺に所属すれば、もう他の宗教や他の寺に変わることならないので、自らの宗派の教えを積極的に広く説いて、他の人々が教えを信じるようになってもらいたいという意欲を持たなくなった。それが今日まで尾を引いて、寺は仏教を一般の人々に広く説き弘めようとの努力を怠るようになった。こうして日本の仏教は停滞し、未だにそこから脱却できないままである。

## 《盂蘭盆会法要》

八月十日（土）

午後二時始まり

\* \* \*

\*法要の際、法名をご持参下されば仏前に安置させていただきます。

\*八月十二日と八月二十一日の集まりは**ありません**。

\*八月二日（座談会）・八月六日（聖典学習会）は**あります**。

## 《真宗入門講座》

毎月十八日（午後六時半始）

担当（副住職）土井尚存

（家庭でのお勤めの練習と御仏事の作法、真宗の教えを初歩から学びます。テキストは「歎異抄」で、寺にもあります。）

# 正信偈に学ぶ同答

## (五十四)

行者正受金剛心

慶喜一念相應後

与韋提等獲三忍

即証法性之常樂

〔書き下し〕行者、正しく金剛心を受けしめ、慶喜の一念相應して後、韋提と等しく三忍を獲、すなわち法性の常樂を証せしむ、といえり。

〔現代語訳〕「行者は他力の信を回向され、如来の本願にかなうそのときに、韋提希と同じく喜忍・悟忍・信忍の三忍を得て、浄土に往生してただちにさとりを開く」と述べられた。

\*

N 「今回は〈すなわち法性の常樂を証せしむ、といえり〉の箇所を話して下さい」

D 「この句の意味は、信心をいただいた人は、この世のいのちが終わると、即座に法性のさとりを証しする、すなわち大涅槃の証りを開いて、浄らかで不滅の安樂に達する、と善導大師は仰せになりました、といわれるのです」

N 「法性のさとりととは」

D 「難しいですね。法性とはいっさいのもの（事物）の真の本性のことです。その本性は不可得で空といわれています。もともと一切は空であると覚るのを

法性の覚りといいます。そう覚りきられたお方が仏とお聞きしています」

N 「法性の常樂とは」

D 「法性の覚りには常樂という功德がともないますので、〈法性の常樂〉といわれるのです」

N 「では常樂とは」

D 「法性の覚りのことを大涅槃とも申しますが、大涅槃には常・樂・我・淨の四徳があり、その中の常と樂とで代表せしめて法性の常樂といわれるのです。そこで常とはいつまでも変わらないことであり、樂とはまことの安樂の意味です。なお四徳の中の〈我〉とは自在の義といわれ、絶対的自由の境地のこと、また浄は清浄で煩惱の汚れが一切無く浄らかな智慧で満たされていることです。すべて涅槃の徳です。それはまたお浄土の徳です。浄土に生まれるとそういう功德をいただくことができますといわれています」

N 「ものの性質は不可得で空というのは」

D 「これについては先達から教えられたことなのですが、例えば、目の前の〈事務機〉は事務をするための道具としての事務機ですが、しかしこの性質は決して不変的な本性（自性という）ではなくて、縁によって性質は変わります。たとえば、

机の上のぼって棚の上の物を取るなら、〈事務機〉ではなくて〈踏み台〉という性質になります。あるいは地震が来たときに潜れば防災の身の置き場という性質になります。あるいは廃棄物としての大型ゴミにもなりますし、時には薪にもなりましょう。焼けば灰になります。そのように縁によって性質を変えますので、〈事務機〉という固定的な本性はないことになり、一定の性質は得られないから不可得といい、実体的な性質がないから空と教えられています」

N 「ではこの私という存在（法）も、その本性は空なのでしょうか」

D 「ええ、いつまでも変わらぬ我というものはなく、肉体も変わりどうし、心も変わりどうしで、〈固定的に変わらぬ私〉というものはありません」

N 「たしかに一瞬一瞬、変わりづめですが、私は何十年も一定の私が続いていると思ひ込んでいますね」

D 「そうなんです。それを迷いというのでしようね。常に変化しつづめる一切の現象のながれがあるのであって、その中に固定的で実体的な〈我〉とか〈我が物〉は無いといわれるのです。無数の因縁が無量無辺に重なり合い、関わりながら変化している、その一瞬一瞬の流れの中で、その結び目としての個物を我として固定し執着しているのが迷える私の有様ではないでしょうか」

N 「変わらぬ私がいつでもここにいますと思ひ込んでいますから、その私に執着してさまざまなこだわりを生み、その結果苦しんでいるのですね」

D 「ええそう説かれています」

N 「一切が空というような真理をさとるといふことは凡夫にはとても難しくついていけません」

D 「実は真宗では、一切は空であると悟れなどは全然申しません。ただ弥陀の本願を信じ念仏申すばかりです」

N 「では本願を信じた人は、一切は空という法性をさとることができるのですか」

D 「弥陀の本願を信じさえすれば、この世が終われば浄土に生まれて仏に成らせていただけるのです」

N 「話は変わりますが、善導大師のお心は大師の著作の何処に出ていますか」

D 「それは善導大師の觀經疏玄義分へただ勤心に法を奉けて、畢命を期となして、この穢身を捨ててすなわちかの法性の常樂を証すべし。とありすが、この中の〈穢身を捨ててすなわち法性の常樂を証する〉の文に聖人は感銘をうけられて、この正信偈に、善導大師の仰せとして記されたのだと思います」

N 「なぜ尊いと感じられたのでしょうか」

D 「おそらく、臨終の一念に煩惱具足の身であるこの穢身を捨てて、法性（ものみなの本性）を空と覚り、常住にして浄らかな樂をいただけるのだという言葉に注目され、本願を信じた人は、弥陀の本願力によって浄土に生まれ、〈即座〉に法性のさとりを開くのだと聖人は受けとられ喜ばれたのだとかがいます」

(了)